

陳旧性分裂病に出現した自己視体験の一例

昭和39年6月9日受付

信州大学医学部神経精神医学教室

(主任：西丸西方教授)

小片 富美子

A Case of Chronic Schizophrenia with Autoscopic Phenomena

By Fumiko Ogata

Dep. of Neuropsychiatry, Shinshu University, Faculty of Med.

(Director : Prof. S. Nishimaru)

序 論

自己視という体験は複雑でその定義も様々である。例えば Gruhle は「自己像の幻覚」と定義し M. Mikorey 及び Cristockley は「身体模図の障害から発展した妄想である」としている。K. Jaspers は決して単一な現象ではないと述べ「外界に自分の身体を第二の身体として認める事で、それが知覚のことも表象のことも妄想及び実体的覚性のこともある」としている。N. Lukianowicz は自己視が単に幻覚として知覚されるだけではないと述べ「身体心像が視覚野に投射された複雑な精神感覚的な幻覚である」と定義している。よく引用される例には Goethe がフリードリケと別れを告げ、楔悩のうちにゼーンハイムからドルーゼンハイムに旅した時の体験がある。以下その体験を引用する。

「私の目でない心の眼で自分と同じ道を逆に馬で帰ってくる自分をみた。その自分は私が今迄着た事のない着物を着ていた。この幻像をみて私は別れの瞬間のわずかな安らぎを感じた」。

M. Mikorey はこの例を心的葛藤から生じた例として引用しているが、自己視体験は異つた様々の原因で起りうる。

著者は今回、陳旧性分裂病患者に出現した自己視体験と思われる例を観察する機会を得たので、発現様式の様性を検討し考察を試みた。

症 例

女 25才 H. E.

家族歴及び病前性格

家族歴では従兄一名に分裂病者があつた。同胞五名中第三子で他は健康である。

母親の述べる病前性格は、遠慮深く肉親に対し特に

優しく何事にも熱中しやすい性格であつたという。

発病と経過

昭和29年16才高校一年の時、今迄になく徹夜で勉強する日が続いたある日「癪病になつた様に思う、死にたいから毒薬を買うお金をくれ」といつたり、理由もないのに泣きだし、いつ迄も泣き止まなかつたりする様になつたので某精神科を訪れた。そこで分裂病と診断され外来で一年間電撃療法、特殊薬物療法等の治療を受けた。症状は寛解したが家人が通学は不可能と考えて退学させた。やがて本人の希望で会社に勤務することになつた。以後五年間通勤し、その間、時々一寸沈み込んで私は不幸だと歎いて、母親に将来を悲観的に話す事以外は、会社に友人も出来て交際したり、よく家事の手伝いもしたりし、当時病床にあつた父親の代りに家計の助けともなつた。

昭和36年5月人が自分の顔ばかりみるから嫌だといつて欠勤し始め、人前であくらを組むので注意すると、そう命令されるからだと反抗したりした。

昭和36年9月母親を物差でなくつて殺すといつて興奮したので、入院させようとしたが納得しなかつたので家で薬だけを飲ませていた。昭和37年2月自分から病院にゆかせてと言ひ某病院に入院させた。某病院入院中患者が中国人の女の人がみえるとか、カツラマサノリという殺人犯がみえると言つたり、だれともわからない男や女の声が聞えると訴えたりしたという記載がみられる。その病院を無断離院する事が多くなつたので昭和37年6月当病院に転院した。

入院時体格中等、肥り気味で身体的な異常所見は認められない。診断は陳旧性分裂病である。患者は衣服も汚れ髪も伸びたまゝの姿で表情に乏しく、前こゝみになつて時々腿を高くあげて不自然な歩き方をしたり、急に廊下を走つてあるいたりし、布団を破つて寝ている時には独語がみられた。しかし疎通性は保たれ

ていて、患者は自分に命令したり殺すと聞えたりして、追いかける様な気がしたので、ふり返つたら茶色の服を着た男の人がみえたとか、行きたくない方にゆかさされる等と訴え、何とかしてくれる様にしばしば訴えてきたりした。

ほゞ一ヶ月間この様な追跡妄想、幻視様の体験や命令的脅迫的幻聴、作為体験等が認められた。

入院直後からクロールプロマジン 300mg、ピレチア 75mg によつて治療を開始した。時によつてアモバルビタール 0.5g を静注した。次第に上記症状は消退し作業療法に参加して他の患者と話をしたり、身なりを整えたりする様になつたが、ある日次に記載する様な異常体験を語る様になつた。

この体験を述べる時には患者は動作が緩慢になり、不眠の為夜廊下を歩きまわり、又時には茫然と身動きもせず立っている。こんな時は話しかけても以前の様な活潑な返答は得られなかつた。しかし、この異常体験を否定すると同時に入院後の症状消退時の状態に急激に戻つた。

異常体験について

患者は「目の前に家にいた頃の私がみえます。不安でとても気分がわるいです。目を閉じたらみえないけど気になつて、つい目をあけてしまう」と述べ、実際目を半分閉じ細目をあけていたが、それでも前方を見つめ続けている。又「その人は黒いズボンをはいて黒いセーターを着て、三米位離れていつも同じ場所に立っている。手はとどきません。ポーズとかすんでみえる。何の動作もせず立っているだけです」と言い、その幻像は患者の現在の動作や、表情などは真似したりしないが、家にいた頃の自分だという事は全体の感じからわかるし、患者に対しすべての命令を下している様に感じられる。全身から感じられるのであつて聞えて来たりするのではない。一時間も二時間もみえたり、瞬間的に現われて消えてしまうこともあると語つた。

患者は翌日になると表情が明るくなり、雑誌などを眺めていて「もう私はみえなくなりました。とても気分がよいです」と述べた。

二週間程たつて患者は窓に向つたまゝ振返るのも嫌がり、人の顔をみたくないといふ「私の考えが人に伝わつた時、その人の方を見るとその顔が私の顔になつています。私の悲しい気持が通じて、むこうも私同様の悲しい表情をし、下品な事、例えばテレビで観た半裸の女の事を考えていると、それが人に伝わつてその人の眼が下品な目つきにかかります。又私がその人に殺意を抱くと私と同じ憎らしげな目つきで私をみて、

私がしていると同じ様に口元を歪めます。時々むこうが国賊だと言つているのが私の胸に聞えて来ます。これは私が考えている事と同じです」と述べ、「私と全く同じになつてしまい、私はもう一人の私がそこにいると感じます」と主張した。大体いつも定まつた二、三人の人に現われ、もう一人の私でいるのは一、二時間から幾日にもわたることがあり、又瞬間的に体験する事もあるらしく、顔を近づけて来て、じつと医師をみつめながら「今私の気持が通じたでしょう。男の様だと思つたでしょう。私の顔になつてみえる」と言い、二、三分後「もう私の顔ではない」等と述べる事もあつた。

やがて「考えが通じてしまう事はあるが私の顔になつてしまう事はなくなりました」と言う様になつた。この体験は約二十日間続いた。

数週間たつて茫然と立つて人の顔を凝視する様な態度を示し「気持が人に通じた、とたんその人の肩に私が乗つてしまい、そこに乗つているのが見えるんです」と言い、「誰かに気持が伝わると、私の魂の様なものが私から抜け出した様に感じ、そしてその人の肩にその魂の様なものが乗るのを見ました。私は抜け殻になつた様に感じました」と述べた。そして手で手掌位の大きさを示して「こんな小さな私が見えます。坐っている様子だが黒い影みたいで輪郭のはつきりしません」と言い、二、三分後には凝視していた視線をそらして「もう誰にも気持が通じなくなつた。だから肩の所には何もみえません」と述べた。

以来この自己を何等かの形で外界に認めるという体験は否定されている。

しかし患者はその後、又以前と似た内容の命令的脅迫的幻聴等が現われ、良悪の経過を繰返し、二年後の現在も尚入院加療中である。

要 約

本症例においては陳旧性分裂病患者の一時期に突然「過去の私がみえる」という幻視体験が生じ、不安を訴えた。その幻視は一日だけで消失した。二週間後思考伝播を訴え、同時に被伝播者の顔が患者自身の顔と同一化し表情や、顔の動きも同様に感じられるという体験を述べた。やがて被伝播者が患者と全く同じであり、もう一人の自分があると二次的妄想に発展した。この体験は約一ヶ月間続いた。しかし思考伝播は引続き認められ、やがて被伝播者の肩の上に患者から抜け出た黒い影の様な自分自身の幻像がみえる」と訴えた。この体験はごく短期間認められただけである。

以上の様に患者自身を外界に認める事についての多

彩な体験が述べられた。

以来、二年を経るが同様の体験は認められない。

考 察

本症例においては一応発見様式を異にした自己視と考えられる体験が三回にわたり出現したと考えられる。即ち<体験Ⅰ>、患者の外界視野に過去の自己の幻像をみた。<体験Ⅱ>、思考伝播と同時に被伝播者の顔が患者自身の顔と同一化し、もう一人の自分の存在を感じた。<体験Ⅲ>、被伝播者に繋る空間に自己の小さな幻像を見た。

以上各々について検討する事とする。

体験Ⅰについて

自己視の際、自己像が常に「鏡像」の様に見えるとは限らないという事は、K. Jaspers, N. Lukianowicz, S. Arieti 等の認めているところである。体験Ⅰでは患者の述べる過去の自己の幻像は K. Jaspers の述べる幻覚の定義と照らし合せると、幻覚と仮性幻覚の両方の性質を備えていると思われる。即ち「あそこにみえる」という実体性があつて、「目を閉じると見えなくなる」という外部的客観的空間に現われるが、感覚的要素が不鮮明で恒常性がない。しかし「よく見ようとすると見えなくなる」のであつて被動性の感がある。又「過去の自己の幻像」という事について、井村が引用したミュツセの体験では、自分を見て笑つているところの現在と全く違つた病み衰えた男の幻像がみえ、二十年後の自分の姿をみたと述べ、井村は自己視の特徴は幻像が現在の自分と全く違つていても、自分の姿だという確信性をもっている事であるとしている。

体験Ⅱについて

この場合 K. Jaspers のいう妄想知覚による人物誤認と解釈する事も出来る。しかし N. Lukianowicz の観察した類似の体験例で、陳旧性分裂病患者は外界視覚野に自分自身の胸や頭、多くは顔だけの幻覚を体験し、その幻像が時々自分の表情や顔の運動等を真似する事があり、患者の考えている事と同じ事を言っているのが胸の中に聞えてくると述べ、その幻覚を自分自身であると感情的にも感ずると述べている。体験Ⅱでは引用例の示す自己像の幻覚としての体験はないが N. Lukianowicz の述べるところの幻視 (Visual Perception) 以外の自己視の性質を備えている様に思われる。即ち、対象が話す事を胸で聞く事ができ (Pseudoauditory Perception) 又自分と全く同じ動作を感ずる事が出来る (Kinesthetic Perception) 等である。又 M. Mikorey は分裂病患者の二重身体

験は思考被影響性による人格の分裂が、ある種の場合に妄想として発展して生ずるものとしている。本体験も先づ自己と被伝播者との同一化が認められて後に「もう一人の私がいる」と確信している点は二次的妄想と考え得る。即ち体験Ⅱは思考伝播により自己同一化が生じ、それを自己像と確信した発展妄想の体験と考え得る。

体験Ⅲについて

先づ類似の報告例について N. Lukianowicz の癲癇患者の体験の大略を述べる。「私は私自身を感じなくなり、肉体が抜け殻の様になつた。とたん私から影の様なもう一人の私があぬけ出した。彼は私の鏡像の様にみえ、うなづいて歩き始め、彼の言葉が胸に聞えた」この引用例と本体験の異なる点は、先づ幻像が体験Ⅰと同様真性幻覚と仮性幻覚の両方の性質をもっているが、小さく影の様なと述べて輪郭や色彩は体験Ⅰに比し一層不定である点、及び既述の (Visual Perception) 及び対象を感情的にも、理性的にも (emotionally and intellectually) 自分の分身であると感じずる事 (Psychoemotional Perception) の二つの性質のみを持つている点、思考伝播があつて被伝播者に繋る空間に自己の幻像を認めている点等である。

以上の如く検討し各々の体験は自己視体験と考えてよいと思われる。

K. Jaspers は、この様な場合の多彩な体験にも互いに類似点があるとして「その類似点は我々自身の姿の身体模図が、外の空間の中で現実性を得るところである」と述べている。

尚本例の自己視体験が、思考伝播と密接な関係があつたという点は特異的である。

結 語

- 1) 分裂病患者に出現した自己視体験について、その体験内容を報告した。
- 2) その体験様式の多様性について検討した。
- 3) 本症例の自己視体験は、思考伝播と密接な関係を持つて出現した。

西丸教授の御指導を深く感謝いたします。

本症例の為に御援助下さつた事を湖畔病院副院長中村忠男先生に御礼申し上げます。

文 献

- ①井村：幻覚，異常心理学講座，②ヤスパース：精神病理学総論，上巻，③M. Mikorey：Phan-

tome und Doppelgänger, 1953, München.
④S. Arieti, J. M. Meth: Rare, Unclassifiable,
Collective, and Exotic Psychotic Syndromes,

American Handbook of Psychiatry: Vol. 550,
1959. ⑤N. Lukianowicz: Arch. Neurolog.
Psych. 80, 199, 1958.